

## 秋色の湖

静かだ。街の騒音は一切聞こえない。時折聞こえるのは小鳥の囀りのみ。そして顔を撫でるそよ風。大山山麓の小さな湖に紅葉は写り秋色は 2 倍になって見えた。湖畔の遊歩道を爽やかな風と一緒にのんびりと歩いてみた。森に囲まれたスイスシャレー風のリゾートホテル「大山レークホテル」の背後に大野池はあった。晴れたときには秀峰大山の頂きがわずかに顔を見せる。

1940（昭和 15）年頃に高峰三枝子が歌って大ヒットした「湖畔の宿」を思い出す。

「♪～山の淋しい 湖に 一人来たのも 悲しい心  
胸の痛みに 耐えかねて 昨日の夢と 焚き捨てる  
古い手紙の うすけむり ………（台詞）（ああ、あの  
山の姿も湖水の水も、静かに静かに黄昏れて行く…。  
この静けさ、この寂しさを抱きしめて、私は一人旅を  
行く。誰も恨まず、皆昨日の夢とあきらめて、幼な児  
のような清らかな心を持ちたい。そして、そして、静かにこの美しい自然を眺めていると、ただ  
ほろほろと涙がこぼれてくる）…～♪」失恋の切なさが伝わってくる。



大野池の水は秋色に染まり美しかった。小魚が岸边近くまで来て無邪気に遊んでいる。ここ大山一帯のブナ林は西日本最大の面積を持ち、雪解け水や雨水をたっぷり蓄え近隣住民の飲料水、農業用水として恩恵を受けてきている。水は全ての命の源であるようだ。 撮影 2014 年秋

